

子ども側からのカリキュラム

—教育の中における障害児差別について—

福井 達雨



☆ 四羽のにわとり

今年の雪は、すごかった。

毎日毎日、ボタボタと雪が降り、風もともなって吹雪になる。

見ているまに、四十センチ、五十センチと積もっていく。

昼間は、その雪がとけて、あちらこちらでズシン、ズシンと、

屋根から雪の落ちる音。大きな老樹の枝が、雪の重みで、ミリミリ、バシンと折れて落ちてくる。

朝になると、昼間の雪どけのしずくが、こおりついて、屋根から大きな氷柱がぶらさがる。男の職員たちは、夜になるとその氷柱や雪をとってきて、ウイスキーやお酒の中に入れ、悦に入ってチビチビやっている。

こんな大雪の朝、私は、止揚学園のにわとり小屋に行ってみた。にわとり小屋といっても、四羽のにわとりがいるだけで、S君という重い知恵おくれの男の子が、その世話をしている。

にわとり小屋では、相変らずS君が、セッセと雪をのけたり、

エサをやったりしていた。

「どうや、よく卵をうみよるか」

「ウン」

「毎日、何個ぐらいうみよるんや」

「四つ、五つ」

「ヘー、よくうみよるなあ。君が一生懸命世話するからなあ」

S君は、頭をかきながら、「へへ」とうれしそうに笑った。

つと、にわとりの水のみを見ると、ゆげがあがっている。オヤと思つて、その水に指をさし入れたら、熱いお湯であった。

「S君、にわとりに、熱いお湯なんかやったらあかんがな」

私が言うと、S君は、不思議そうな顔をした。

S君に言わせると、毎日、大雪が降って寒いので、冷たい水をのませたらかわいそうだから、熱いお湯をやったらしい。

S君の舌足らずな言葉の説明を聞きながら、私は、何かホノホノとするものを感じていた。

S君は、真夏に、にわとりがのどを乾かしているからと、カルピスをやったこともあった。

ある時、S君が、二週間ほどにわたりの世話をしなかった。不思議なことに、その二週間、にわとりがほとんど卵をうまず、S君が、また世話を始めると、卵をうみだしたということもあつた。

こんな時、S君のにわとりへの愛情を強く感じるとともに、一生懸命に人間が生きているという意味を教えられる思いであつた。

現代の人間は、どんなところでもアクセクと必死に生き、"自分分は、一生懸命に生きている"と考えている。しかし、一生懸命に生きて、愛がない場合もある。真実に一生懸命に生きるということは、その対象とするものに、愛をもち、その愛が豊かに生きる生き方であろう。

私は、S君から、そのことを教えられ、すばらしいなあと、深い喜びをもったのである。

☆ 月の中のおうさぎ

先日、悲しい出来事があつた。

テレビを見ていたら、小学校低学年児と幼児五人が、ある大学の先生と対談をしているのがうつっていた。

大学の先生がたずねた。

「月の中は、どうなっているか知っていますか」

何人かの子もが、元氣よく手をあげた。そのうちの一人が、意氣揚々と答えた。

「あのね、月の中にはね、うさぎさんがいてね、おもちをついているんだよ」

大学の先生は、手を大きくふって、

「それはまちがいだよ。月の中はね、大きな岩石がゴロゴロして、ところどころに大きな穴があいていて、うさぎなんか住めないんだよ。そんなまちがつたお話は、信じないようにしましょうね」

周囲にいた子どもたちが、「お月さんの中に、うさぎなんていないよ」と、軽べつしたように、ゲラゲラと笑つた。

それから三十分間、元氣よく答をした男の子は、一度も上をむかず、話もしなかつた。私は、その子どもを見つめ、心が痛んでしかたがなかつた。

どうして、子どものおもい、心を生かしてやらないんだらう。

どんな時でも、機械的、科学的にものを教える社会は、その中で、幼い子どもの心を傷つけ、殺すことが多い。子どもの単純な素直な発想にふれ、そこから教えられ、深い喜びを感じるのが、教育者であらう。

「そうだね。お月さんの中には、うさぎがいて、おもちをついているんだよ。そのおもちは、とってもおいしいよ。そしてね、うさぎさんがおもちをついている地面は、大きな岩や、穴があいていてね。……」

私だったら、このように語ったであろう。その大学の先生は、科学者であって、教育者でなかったのである。何か、教育者として、恐しさを強く感じたひとときであった。

☆ カリキュラム不在の教育

さて、障害児を、幼稚園、保育園に入園させるべきだと、私たちが言えば、多くの人が、賛成してくださるが、その人たちから、

「この子どもたちを入園させることは、よいことだと思いますが、私たちには障害児教育の方法論や技術がわからず、どうして教えてよいのか困ってしまいます。」

これでは、入ってきた子どもが、かわいそうです」

よくこのような質問をうける。こんな時、私は、

「イヤ、いれてくださるだけでよいのです。教育というと、

先生たちは、教えることばかりお考えになる。だから、わからなくなってしまう。障害児が、クラスに入ると、初めは、障害をもたない子どもが、オズオズながら近づいていくでしょう。子ども

は子どもどうし、短時間に一緒に遊ぶようになり、共に手を取りあうようになります。そこから、人間の心が、子どもの心が育っていくでしょう。

現代の教育は、先生の側からカリキュラムが作られ、そのカリキュラムで、形式的に、上から子どもにもむかつて、どんどん教えていく。一度ここから脱皮した、カリキュラム不在の教育が、幼児教育にも必要だと思えます。

子どもたちもっているものにふれ、それに教えられ、その中で先生が思考し、子どもとぶつかる中で、汗や涙を流す教育も必要だと思えます」

乱暴だが、こう答えているのである。

子どもとのふれあいの中で、教育が生まれ、喜びが生まれる。

止揚学園の職員たちを見ていると、

「子どもが、お便所でウンコやオシッコをした」「たたかれたら、たたきかえした」「遊びまわってガラスをわった」「リズムの時に、三十秒立っていた」「名前を呼んだら、じっとこちらを見ている」

このような、日常茶飯事のちょっとした変化にも、大きな喜びを示し、それを自分の喜びとしている。

ここから、教育が生まれる。カリキュラムも、先生側から作る

のではなく子ども側から作りだされていく。

このような世界が生まれれば、「障害児を入園させたいが、どう教えてよいのかわかりません」という質問は、なくなるだろう。

☆ 学校は貧乏やなあ

先日、ある小学校の先生たちに講演をした。

その時、一番問題になったのは、「障害児学級の子どもたちは、毎日遊んでいる。あれでは、学校に来る意義がない」ということであった。

この先生たちは、カリキュラムを作り、算数や国語、音楽や絵画を教え、もっと効果的な教育をしなければ、子どもが不幸だといっているのである。

私は、障害児学級の先生にたずねた。

「どのような教育をされているのですか」

「カリキュラム通りには、授業はしていません。子どもの心が不安定だと、算数をやめ、自動車に乗せて、公園や、動物園や、レストランに行くこともあります」。

また、ある日、校長先生が、一人で運動場の草ぬきをしておられました。それをみつけた障害児学級の子どもたちが、「一人で草ぬきをさせるのはかわいそうや。校長先生はおじいさんやか

ら、ぼくたちも助けに行こう」と言いだし、国語の時間だったけれども、それをやめて、草ぬきをしました。

この時、子どもたちが、「学校が貧乏やから、草ぬきの人がたのめんのやなあ。だから、校長先生が草ぬいてるんやろう」と言い、校長先生が、その返事に困っていたことを思い出します。

それから校長先生は、障害児学級の子どもたちを本当に大切にしてくださいようになりました」

障害児学級の先生は、こんな話をされた。

私は、すばらしい教育が、そこにあることを感じた。

しかし、他の先生たちは、これは教育ではない。教育とは、カリキュラムを通して、先生が子どもを教えることだと言われる。

このような機械的、科学的、プログラムの教育技術論がはばをきかせている現在、その障害児学級のあり方に、非難がうまれるのは当然であろう。そして、この教育論から、障害児は、教育の効果がないと、しめ出されてしまう。しかし、非難をする前に、教育の本質とは何かを、もう一度みなおしていただきたいものである。

教育とは、子どもの中にあるものを生かし、育て、創りだすものである。子どもの心を無視した教育は、なんと恐ろしい教育であろう。

(止揚学園)